

「環境と地域の活性化」

- 三鷹市の事例から -

東京都三鷹市長 清原 慶子

1 はじめに

三鷹市は、都心から西へ約18km、東京都のほぼ中央に位置し、東西6.35km南北5.24km面積16.5km²、人口約17万人の都心近郊の住宅都市です。

市内には井の頭公園、野川公園、国立天文台、国際基督教大学などの緑に恵まれ、神田川、仙川、野川といった緑や水の自然に恵まれた環境のなかで、都市農業も息づく生活都市として、また三鷹市立アニメーション美術館（三鷹の森ジブリ美術館）のある市として発展を続けてきました。しかし、昨今の経済発展により身近な自然環境は減少し、マンションなどの高層住宅が増加していることも事実です。

三鷹市は昭和25（1950）年に市制を施行し、今年で57年、昭和48（1973）年に公共下水道100%を全国で初めて普及した市として、「高環境・高福祉」のまちづくりを進めてきました。環境に関する市民の意識も高く、最近では、地球温暖化の問題に市民の多くが関心を寄せています。

本日は、三鷹市における環境施策の事例を通して、自治体の視点から「環境と地域の活性化」について報告します。

2 市民参加による「三鷹市環境基本計画」の改定

平成14（2002）年3月に策定した「三鷹市環境基本計画」は、平成19（2007）年3月に改定を行いました。改定は、一般公募による市民・団体を含む「三鷹市環境基本計画改定に係る市民検討会議（以下「市民会議」という。）」と協働により素案の検討を進め、三鷹市環境保全審議会での審議とパブリックコメントを経て確定しました。

市民会議は、平成18～19年度で活発な議論が9回開催されました。（当初8回の会議予定のところ、委員の要望により1回多く開催）

三鷹市では、これらの計画を策定する場合には、基本的に公募委員を含む

市民会議による議論を実施しています。市民・事業者・市の協働による素案作りは、この計画の実行段階に向けて「協働で取り組む3大プロジェクト」の提案として結実し、さらに、推進体制として平成19年度に「環境基本計画推進市民会議（仮称）」を設置することが提案され、私は予算化をはかりました。

今や環境についても、市民と共に計画づくりからその実行段階、評価段階においても「協働」で進めていくこととなっています。地域活動とどのようにつながっていくかが鍵となると思います。この環境基本計画の改定は、市民力を環境施策に反映したものとなっています。

3 ESCO事業の活用

三鷹市では、平成10年度よりESCO事業を活用した省エネルギー対策を行っています。ESCO事業は、Energy Service Company の略で、省エネ診断を行い、これに基づき適した省エネ手法を提案し、資金調達から、設計・施工・管理に至るまで行う包括的なエネルギーサービスのことをいいます。（下図参照）

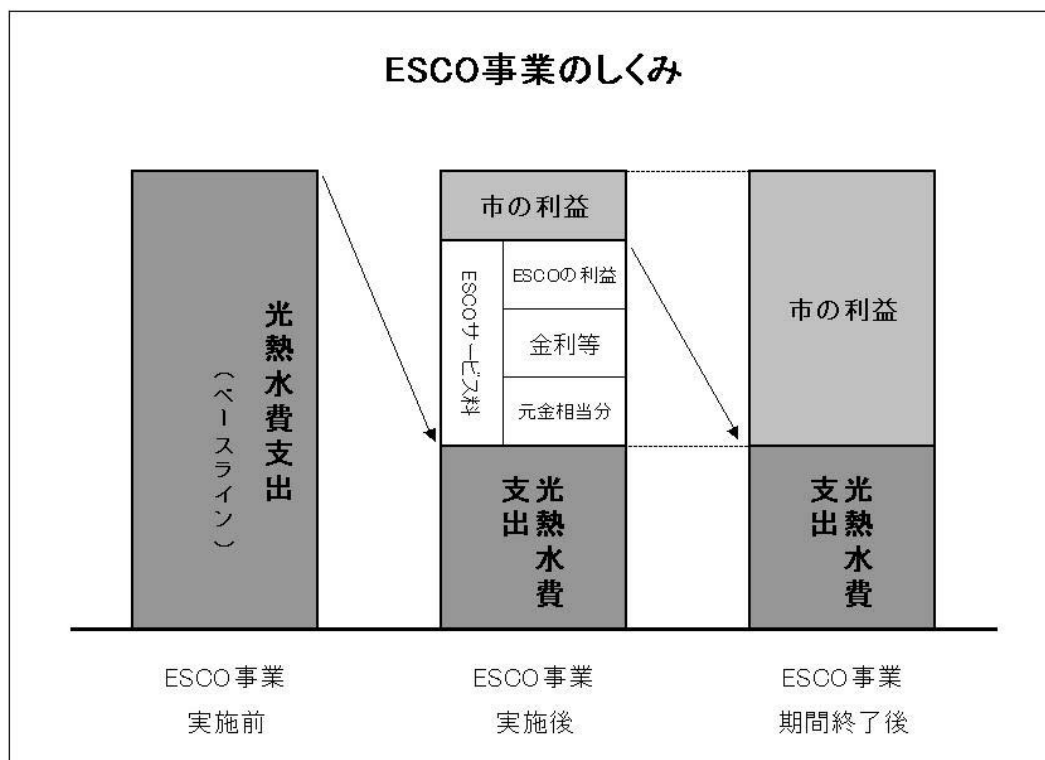


図 - 1 ESCO事業のしくみ

三鷹市でのE S C O事業

平成10年度 三鷹市本庁舎
平成13年度 牟礼コミュニティ・センター
平成16年度 環境センター（可燃ごみ焼却場）
芸術文化センター
東部下水処理場

平成16年度に実施した3施設のE S C O事業の累積削減実績は、平成18年12月現在、以下のとおりです。

	電 力 (kWh)	ガ ス (m ³)	二酸化炭素換算 kg - CO ₂
環境センター	2,057,000		778,000
芸術文化センター	437,000	26,000	222,000
東部下水処理場	836,000		316,000
合 計	3,330,000	25,000	1,316,000

毎年、委託料（E S C Oサービス料）をE S C O事業者に支払いますが、E S C O契約が終了した際にはこの委託料以上の利益（コスト削減）が生じます。

E S C O事業は、新たな公共事業を創設するとともに、光熱水費の削減された経費よりE S C Oサービス料を支払うことから、市の費用の負担がなく実現できる省エネルギー対策です。

さらに、二酸化炭素削減効果（換算）は大きく、地球温暖化対策としても有効であるといえます。

また、三鷹市では、E S C O事業による市の利益の2分の1を「環境基金」に積み立てています。

平成19年度は、153万円の積立を行います。平成22年には600万円以上の積立ができる予定です。

4 環境基金の活用

環境基金は、私が市長に就任した平成15年度にまず2,200万円を積み立てて創設しました。（市費2,000万円、寄附200万円）

先に述べたE S C O事業の削減分と市内事業者や団体の方からの寄附で運用しています。

環境基金の活用は、公募された市民、団体、事業者と学識経験者からなる

「環境基金活用委員会」で調査及び審査が行われ決定されています。

現在、環境基金からの助成としては、「新エネルギー導入助成金交付制度」として、太陽光発電、燃料電池コージェネレーションなどの設備導入に対する助成があります。

「新エネルギー導入助成金交付制度」の平成18年度までの実績は、次のとおりです。

	件数	発電量合計(kW)	助成金額合計(円)
平成16年度	5	19.01	874,500
平成17年度	5	21.53	870,000
平成18年度	5	14.21	647,000
合計	15	54.75	2,391,500

そして、「環境活動事業助成金交付制度」として、非営利団体が環境活動事業を実施する場合に事業費の一部を助成しています。

環境活動事業には、毎年1～2の事業に支援をしています。

また、児童が環境に興味を持ち、家族全体での環境保全行動に広げていくことを目的に「環境ポスター展」を実施しています。環境ポスター展では、多くの児童から応募があり、15名を表彰しました。

さらに、個人や、団体が先導的な環境活動を行っている、あるいは永年環境活動を実施している方々の顕彰事業を実施しています。私は、この善意の行動をぜひとも取り上げていきたい、市民の模範となる皆様の活動を広くお知らせして、なかなか行動に踏み込めない市民の方々が第一歩を踏み出すきっかけとなってほしいと考えています。これらの事業も、環境基金を活用して行っていますので、選定は「環境基金活用委員会」が審査しています。

環境活動顕彰では、平成18年度「環境活動表彰」が3件(団体2、個人1)です。例えば、個人の方で環境研修会を開催する、あるいは環境に関する科学実験を行って環境の大切さを説明するといった地域での活動に対して表彰しました。

「環境活動功労表彰」は、4件(団体2、個人2)を表彰しました。環境基金で活用できる事業は、市民、団体、事業者に対して行う事業に限られています。

この事業を実施してから、市民や市内事業者、団体の皆様から、毎年寄附の申し出があります。

創設から4年、環境基金は地域に根ざしたものになっていると感じています。

5 環境教育の実践

三鷹市での環境教育は、市長部局の生活環境部や都市整備部で行う環境学習と、教育委員会が行う環境教育があります。

具体的には、自然観察教室や省エネルギー講座、施設見学などの開催や、小中一貫校での環境に関する授業で「三鷹市における環境問題」について職員の出前講義を行っています。

環境講演会では、市民の方を対象にアルピニストの野口健さんや気象キャスターの岩谷忠幸さんによる「ごみ問題」や「地球温暖化」に関する講演会を実施しました。環境の大切さ、自然保護の重要性についての体験的な講演は好評を得ています。

平成 19 年度には、「ものを大切に作る、自然を守る」といったテーマのプロジェクトによる環境演劇を児童対象に行う予定です。

また、学校給食から出る残さと剪定枝を堆肥にして、農業協同組合との協働でエコ野菜を作り、食育とごみのリサイクルの教育を「エコ野菜地域循環モデル事業」として実施しています。

子どもたちは、教科書だけでは知り得ない環境問題にふれることができ、あらためてどうしたらよいか考えるきっかけ作りとなっています。

6 丸池復活プランづくりワークショップ

三鷹市での環境施策は、市民の皆様の参加と協働がなければ成しえないものばかりです。

市民参加と協働による地域活性化の重要な事例として「丸池復活プランづくりワークショップ」があります。

丸池は、かつて仙川の水源として子どもの遊び場でした。しかし、昭和 44 (1969)年に水の汚れなどの理由から埋め立てられ、児童公園となりました。

その後、かつての子どもであったおとなたちが、「今の子どもたちに自然と遊べる楽しさを知ってほしい」「丸池を復活させたい」と願うようになり、平成 1 (1989)年に市民から提出されたまちづくりプランでは「丸池の復活と仙川流域の親水公園化」が提案されました。この声は市の「緑と水の回遊ルート整備計画」策定へと引き継がれ、丸池復活にむけ市民と行政の協働がスタートしました。

まず「丸池復活プランづくり運営委員会」が発足しワークショップが開かれました。7回のワークショップで「丸池復活プラン」の提言が提出されました。

これをもとに、次は実施設計ワークショップが4回開かれ、完成予想図が

できました。延べ 1,000 人を越える市民の参加によって出来上がったものです。

そして、新川丸池公園は平成 12 (2000) 年 4 月に開園となりました。

三鷹市には、幸いこのような市民力があります。行政だけでは実現が難しいこと、あるいは市民だけではどうしようもないことが協働という絆のもとに実現できたという事例は、公園づくり、学校づくり、コミュニティ・センターづくり、公園やコミュニティ・センターの管理運営などの事例として多様にあります。

昔懐かしい自然とのふれあいは、「環境」という括りではまとめられないほどの大きなテーマだと思えます。丸池はその後、どんどん成長しています。平成 18 (2006) 年、二期工事が完成し、「丸池の里」には雑木林公園、体験型の水田などの整備が進むとともに、市民によるツアーの実施やまつりの運営などが展開されています。

7 むすびに

地球規模での環境破壊が進み、地球温暖化がマスコミをにぎわしている現在、地域の中で環境問題に対して何ができるか。何をすべきかは大きな課題です。いまは、具体的に行動すべき時期にあると思えます。いいえ、行動しなければ、次世代の子どもたちに残すべきものがなくなってしまうような気がしてなりません。

経済発展や地域の活性化を継続して進めることも大切なことだと思えます。しかしその中で「環境」というキーワードなくして未来は語れません。

三鷹市で実施している E S C O 事業や環境基金の活用は地域活動と地球にやさしい行動が一体化した部分だと言えます。また、環境教育は、これから巣立つ子どもたちへ伝えるべきメッセージの継承と共に実践すべき取り組みと考えます。

丸池の復活は、市民力の結果生まれた自然回復の事例です。

そして、「三鷹市環境基本計画」はこれらの一つの結実でもあります。市の環境に関する施策のすべてが網羅され、市民の役割、事業者の役割、市の役割が明確に記されています。この三鷹市環境基本計画を道しるべに今後とも環境に関する市民の皆様との協働による地域の活性化に努めていきたいと考えます。

以上